Special interview

鎌田實

諏訪中央病院名誉院長

ひと言に“社会貢献”といっても、貢献の内容や、貢献者の取り組み姿勢、キャリアなどは、じつに様々である。諏訪中央病院名誉院長の鎌田實先生は、医師として、地域の医療・保健・福祉に30年以上も携わってきただけでなく、チェルノブイリやイラクでの国際的な医療支援活動にも積極的に参加、数々の名誉ある賞を受賞している。また、『がんばらない』『あきらめない』『病院なんか嫌いだ』等の著者としても知られ、愛読者も多い。社会貢献を地域医療活動を通して日々実践している鎌田先生から、当機構のスタートに当たって、今後の「あるべき姿」へのエールと期待を送っていただいた。

僕が医者になったのは、18歳の時に父と交わした約束

僕が赴任した32年前は、国立大学の医学部を卒業して、地方の名もない病院へ行く医者なんて、ほとんどいなかった。大学の教授からは、「都落ちしちゃダメだ」とか「一回地方に出たらなかなか戻って来れないぞ」とか、言われてね。しかも当時の諏訪中央病院（茅野市）は、4億円ほどの累積赤字を抱えていて、医者もいないという、大変な状況になっていた。

脳卒中の患者さんが多いので地域の医療費も高く、国民保険の経営も火だるま状態。その上、病人が多いのに、患者さんはみんな隣の諏訪市の病院に行ってしまう。病院自体が瀕死の状態だった。三重苦ですよ。だから当時の茅野市長は、とにかくいい医者に来てもらいたいと、盛んに窮状を訴えていたわけです。

そんな病院に僕が行こうと思ったのは、医者になりたいと決心した18歳の時に、父親とした約束が大きな理由だったのかも知れない。僕の実家は、長い間母親が心臓病を患っていて、タクシー運転手の父親がその入院費を稼ぐのに非常に苦労していた。とても大学に行けそうもない経済状況だったし、ましてや医学部なんて、無理だろうと。

だけど都立高校の仲間のほとんどは進学するのに、なんで俺だけ就職しなくちゃならないんだって、口惜しくて、納得できなくて、泣きながら父親に何度も食ってかかり、何で俺のことをわかってくれないんだと、恨みましたね。そのうち根負けしたのか父親は、もうお前の好きなようにしていいって。ただ、うちみたいな貧乏な家の人間が医者にかかる時どんな思いでいるか絶対忘れるな。これからはすべて自分で責任を持って生きろ。困っている人とか弱い人、貧乏な人のために医者として働けと、父親に約束させられました。

だからこの病院に来る時も、自分のような人間でも必要としてくれる所があるんだと、あまり抵抗感はなかった。

地域の人たちと支え合って築いてきた新しい医療のかたち

最初は、見事に挫折からのスタートでした。当時この地域で脳卒中が多かったのは、食習慣、要するに塩分の摂り過ぎに原因があった。長野は、どちらかといえば貧しい県で、周囲には海がないので十分なたんぱく質が摂取できない。お米はたくさん獲れるけど、おかずが少ないために梅干しとか野沢菜、たくわんといった塩辛いものをたくさん食べていた。それが危険だからと、地域の公民館などで、多い時には年80回ぐらい脳卒中に倒れないための勉強会を開いてきた。だけど、江戸時代からずっと続いているような食生活が、東京から来た若輩者の僕がいくらいっても、そう簡単に変わるはずがない。

糖尿病の患者さんを外来で指導しても同じで、翌週に診察にきても、ダメだといったお酒は飲んでるし、食べたいものを食べている状態だった。初めは僕もショックで、ムッともしたんだけど、そのうちにそうそう簡単に変わらないのが人間だし、変えられないのは、僕に力がないからだって教えられたんです。それからは少し気が長くなりましたね。

その人の心を揺さぶれない僕の説明のどこかが悪い。要するに彼らの心の中に入れないから、食生活も変わらないんだってことを学んだ。言い換えれば、僕は地域に出て行って貢献している

地域に貢献しているつもりなのに、逆に地域から教えられた。

つもりだったのが、実は僕が地域から教えられていた。

それはいまも同じです。この地域の人たちの命を支える病院をつくり上げてきた。地域の人たちもそれに呼応して、ボランティアという形で僕らの病院を支えてくれている。だから、人を支えるということは、基本的には一方的に支え続けるということはなくて、支えているような感じで、実は支えられたりしているんじゃないか、という気がしますね。

医療というのは、本来、安心を売る仕事

日本の医療は、特にこの10年間、どんどん近代化し高度化して、ものすごく進歩している。ガンにしても心筋梗塞にしても、救命率は非常に高くなっている。

にもかかわらず、医療に対する一般の人たちの不満感は募っていて、2年前のある調査では60パーセントの人が不満を持っていた。つまり、国民の過半数がいまの医療に不信感や不満感、不安感を抱いている。これはいったい、なぜなんだろう。ふつう物理学とか化学であったら、進歩とともに満足度も上がるんだけど、医学がちょっと違うのは、そこに人間が介在するから。つまり、人は医療の高度化を望みながら、同時にやさしい医療、人間味のある、温かい医療を望んでいるからなんですよ。

特に日本人は、大概の人は80歳か90歳ぐらいまで生き延びられればいいと思っていて、それ以上、生きることを望む人はあまりいない。じゃ、日本人は何を望んでいるかというと、死ぬ時に痛いとか、苦しい思いはしたくないということと、家族にあまり迷惑をかけたくないということなんです。

だけど、この国の医療は確かに進歩しているけど、自分がそうなった時に守ってくれるかというと、患者への対応は冷たいと。例えば、ガンになった場合、初めはやさしく、丁寧に説明して手術をしてくれるけど、ちょっと療養が長くなったり再発したりすると、医療機関は冷たい対応しかしなくなる。

そういう状況を、友人とか親戚が入院した時にたくさん見せられているから、この国の医療は自分たちを守ってくれない、最期は見放されちゃうと思ってしまう。だから、満足度は上がらないという悪循環です。

医療というのは本来、安心を売る仕事なんです。だから、この諏訪中央病院が2万坪の土地に救命のための病院だけでなく、特養施設や老人介護施設、ホスピス病棟など多様なメニューを持ったり、24時間体制の在宅ケア・システムをつくったりしたのも、そのため。患者さんを基本的には見放さない、放り出さないための、安心のシステムなんです。

チェルノブイリで考えた医療の原点

昭和61年（1986年）4月26日、ウクライナ（当時はソビエト連邦）にあったチェルノブイリ原子力発電所の4号炉が爆発して、炉心内部の放射性物質が北半球全域に拡散した。これがチェルノブイリ原発事故。放射能汚染は、ウクライナだけでなく、隣のベラルーシ、ロシアに及び、事故後20年たって、子どもと若年層に甲状腺ガンの発生率が異常に高くなっている。人類、地球環境に与えるその影響は、予測不可能な部分もあって深刻な事態になっている。

チェルノブイリの支援活動は始めてから15年になりますが、これまで医師団を82回派遣して、6億円のお金を集めて、白血病や甲状腺ガンの子どもたちの治療に当たってきました。最初は、こんなに長く、これほどのお金が集まるとは思っていなかったんです。

実は、活動の産声はここで上がって、長野県全体に広がり、全国各地に拡大していった。初めはなんでソ連の子どもなんか助けるんだって、よくいわれましたよ。

募金のための講演に行った際も、あるおじいちゃんが、「親戚がシベリアに抑留されてソ連兵にひどい目にあった。なのに、なぜその国の子どもたちを助けるんだ」って。でも子どもたちは、自分から望んでその国に生まれてきたわけじゃないから、子どもに罪はないでしょって。そうしたら講演の帰り際に、「先生、わかった。子どもに罪はないもんね。それなら俺も応援する」といって、しわくちゃの千円札を出してくれた。

チェルノブイリには、ドクターたちはみんなボランティアで行ってくれる。こんな言い方は不謹慎に聞こえるかもしれないけれど、1度チェルノブイリに行くと放射能の汚染地帯なのに、不思議な魅力がある。ゆったりとした時間がながれている。とにかく日本にいたら絶対に経験できないような時間を過ごすことができる。健康診断に行くと村のおばさんが、お腹が空いただろうといって、ごはんを食べていけとか、これを飲んでいけってドブロクみたいのを出してくれたりね。

ある小児科の先生が言っていたんだけど、日本での診察は近代的な医療機器に囲まれて、それを駆使して診断する。でもここは、聴診器1本でいろんな診断をし、患者さんに信用もしてもらえると。だから、なんにもなくてもいろいろな命を守れるという、自分が失ってしまった医者としての醍醐味みたいなものが、味わえるって。確かに、そうなんです。だから、1度行ってくれたドクターは2度、3度と、面白くなって自分から出かけてくれる。

チェルノブイリで考えたこと助けられない人にしてあげられること

医療というもので、人間の病気を全部治せるんだったらいいんだけど、人間のやることだから、治せないこともある。でも実は医療っていうのは、治せなかった時でも感謝されるんですよ。それを教えられたのも、チェルノブイリ。11人の治りにくい難治性の白血病の子どもを救命しようと思って、僕はベラルーシ共和国のドクターたちに骨髄移植を教えた。10人の子どもは助かって、完治するんですけど、1人だけアンドレイっていう8歳の少年が死んでしまって、僕はお母さんにお悔やみに行った。文化や言葉や歴史が違う

日本人が余計なことをしに来て、うちの子どもは死んだと愚痴を言われるかなと心配してたら、お母さんが忘れられない日本の看護婦さんがいるというんです。

まったく食事が摂れなくなった息子に「アンドレイ何食べたい?」と何日もずっと聞いてくれて、ようやくアンドレイが「パイナップルが食べたい」と。それを聞いた彼女は仕事が終わった夜、町中の店を1軒1軒「パイナップルはありませんか」って聞いて回ったんだけど、経済が崩壊して輸入品も入ってこないので、どこにもない。それが町中の噂になった。寒い2月の雪の中で日本人がパイナップルを探しているよって。その噂を聞いたあるベラルーシ人が「自分の国の子どものために日本人が、そんなことまでしてくれたのか」とパイナップルの缶詰を持ってきてくれて息子に食べさせてくれた。それを契機に元気になって、治ったと思って退院したら、白血病が10ヵ月後に再発して、息子は死んでしまった。でも、雪の中をうちの息子のためにパイナップルを探してくれた日本人がいたことを、私は絶対忘れないって言うわけですよ。僕たちは子どもを助けてあげられなかったけれど、お母さんには感謝された。

医療の大事なところは、助けられない時でも感謝してもらえるというのが、すごいところ。そのことを日本の医療は忘れちゃってるんじゃないかって気がする。だから末期ガンの患者さんを助けられない時、医者のやることはないって言って、追い出しちゃうみたいなことをする。実は、ガンの末期の患者さんにだって、まだ生きているうちに僕たちがしてあげられることって結構あるんだと思うんです。

イラクの4つの小児病院には、一昨年から毎月薬を送っていて、去年は1億円の募金を集めて、主にインターネットで情報交換しながら、こういう薬がほしいといわれれば可能なかぎり送るようにしています。

いろんな国と戦争を繰り返しているイラクも、結局は弱い子どもたちがいつも最大の犠牲者となるわけです。イラクには入れないから、イラクとヨルダンの間にあるノーマンズランドという、難民キャンプがある場所に行って子どもたちを検診したり、イラクのドクターたちにヨルダンのほうまで出てきてもらって、必要な薬などを聞いて送ったりしている。イラクはかつてのアラブ諸国の中ではもっとも医学が進歩していたから、ドクターたちのレベルも非常に高くて、薬の使い方なんかもよく知っているんです。

大人が志を高くもって、小さなことをきちんとやる。それが次世代へのバトンタッチで大切なこと

温かな活動をみんながするといいですね。僕も無理しないで、少しだけやさしい行為をする。隣の人もなんかちょっとだけでいいから困っている人を助ける。あっちの人もちょっとだけやる。いろんなところにちょっとだけが起きてくれば、それは必ず連鎖になって、地域を住みやすくする。それが日本を良くしたりね。憎しみと恨みの連鎖の行き着くところは暴力だけれど、温かさの連鎖の先には平和だと、僕は思っているんです。この国を僕はいい国だと思っているし、大好き。大好きな国を守りたいと思っています。

でも、いま僕たちの国は、いい方向に来てなくて、大事なものを失いだしてるんじゃないかって。豊かな自然とか優れた教育力。地域の教育力も、家庭や学校の教育力も落ちてきました。人間の絆が結構土俵ぎわにあるっていう気がします。

いま必要なのは、志の高い子どもたちを育てることです。子どもを大切にすることです。愛情を注いであげることです。

これまで、医者として人の命にずっと関わってきた。関わってきながら、いずれ僕は齢をとって死んでいくわけだけど、やはり人間の務めとして、つぎの世代にどうバトンタッチしていくかってことですよね。そのバトンタッチの時に大事なのは、命の大切さを子どもたちに教えることと、僕たち大人がよりよい環境をちゃんと守り続けてあげること、それとできるだけ平和な世界をつくってあげることです。僕たち大人が志を高くして、温かな、小さなことをちゃんとやっていくことが大事なのではないかと。温かな行為も必ず連鎖するのです。

ぼくは医者として、地域の患者さんを往診して歩いたり、全国からやって来る外来の患者さんを診察したりして、少しでもみなさんの役に立ちたいと思っている。

その仕事が95パーセントとして、残りの5パーセントぐらいは、やはり環境とか、平和を守るための活動をしたいと思っています。その活動の1つの形が、チェルノブイリの医療支援であるし、イラクの病気の子どもたちの救護活動なんです。

それは、自分が1歳の時に捨てられて、もしかしたら生き延びることができなかったかも知れないのに、育ての親のお蔭で、生きることもできた。未来へのチャンスをもらうこともできた。その経験があるからなんですね。だから、できる限り多くの子どもたちにチャンスをあげたい。これからも、命、環境、平和のことを考えて活動していきます。

かまた みのる
鎌田實（諏訪中央病院名誉院長）

昭和23年（1948年）東京都生まれ。昭和49年（1974年）東京医科歯科大学医学部卒業。茅野市にある長野県諏訪中央病院で地域医療に携わり、昭和63年（1988年）諏訪中央病院の院長に就任。一貫して『地域に開かれた病院づくり』『住民とともにつくる医療』を提唱、実践。諏訪中央病院は地域医療のモデルケースとして、メディアや各界から注目され、多くの患者さんのみならず、数多くの視察者も訪れる。また長年チェルノブイリの放射能汚染地帯での救護活動に参加。平成6年（1994年）『信濃毎日新聞賞（国際医療協力賞）』、平成16年（2004年）には『永井隆・平和記念・長崎賞』を受賞と、医療を通じた国際平和活動も高く評価されている。主な著書に『がんばらない』『あきらめない』。近著に『カラー版 子どもたちの命 チェルノブイリからイラクへ』がある。